四国・水こぼれ話
Water Information Saloon Shikoku
談話室 Vol 111

学校の窓からクジラの見える町

高知県　黒潮町長
下村（しもむら）　正直（まさなお）

黒潮町は、高知県の西南地域に位置し、北東側は高岡郡四万十町、北西側は四万十市に隣接、南側は黒潮流れる太平洋に面する地域で、町の総面積は188.46ｋ㎡である。交通網はＪＲ土讃線と土佐くろしお鉄道中村･宿毛線を乗り継ぐ形と高知県を東西に走る国道56号線が幹線道路となっている。また、高速道路は開通しておらず、空港までの所要時間も3時間近くを要し、いまだ陸の孤島であるという感が否めない。

平成 18 年に、佐賀町と大方町が合併して人口14,000人の「黒潮町」となりました。佐賀地域は、カツオの一本釣りで有名な漁業が主産業で、大方地域は温暖な気象条件を活かした施設園芸や花卉、葉タバコ、水稲などの栽培が行われる農業が基幹産業です。

大方地域では、20年ほど前何人かの若者が「私たちの町には美術館がありません、白砂青松の砂浜が美術館です。そこにあるものすべてが作品です。」という「砂浜美術館構想」を打ち立てました。以来、砂浜や松原で「Ｔシャツアート展」や「はだしマラソン」などさまざまなイベントが行われ多くの皆さんが訪れています。また、日本一遭遇率の高いと言われる漁船によるホウェールウォッチングも盛んで、先週は「ダーウインが来た・生き物新伝説」というテレビ番組で紹介され「学校の窓からクジラの見える町」の面目躍如といったところです。

佐賀地域では、地域を縦断する伊与木川は四万十川から取水して稼動している四国電力の佐賀発電所からの放水で生活用水や農業用水をまかなっている。四万十川流域の皆さんのご理解によっての貴重な水資源であることから、平成16年に「伊与木川清流保全条例」が制定され合併後も黒潮町に引き継がれています。

大方地域では、ほぼ全域の上水の水源となっている清流「蜷川」がある。かつて愛媛大学の水生生物の研究者として著名な先生のゼミの研究対象となり、10年にも及ぶ調査がなされた。それによると、ヨシノボリを始めとするハゼ類の生息が特筆されるとのことで、小河川ながら流域の長さや水量を保ちながら自然の姿が残されている証明であろう。地区の人たちは、将来に残せるものは何かと聞かれたら口をそろえて「川」と言う。中国に「飲水思源」という古い言葉があるが、「伊与木川」も「蜷川」も上流があって下流がある、水を飲むとき上流の人々や自然に思いをはせる。このことは、都市と地方の関係にも当てはまるのではないか、地域間格差が問われる今、「飲水思源」考えてみるべきではないか。

入野の砂浜を走る「はだしマラソン」

漁船によるホウェールウォッチング

伊与木川